

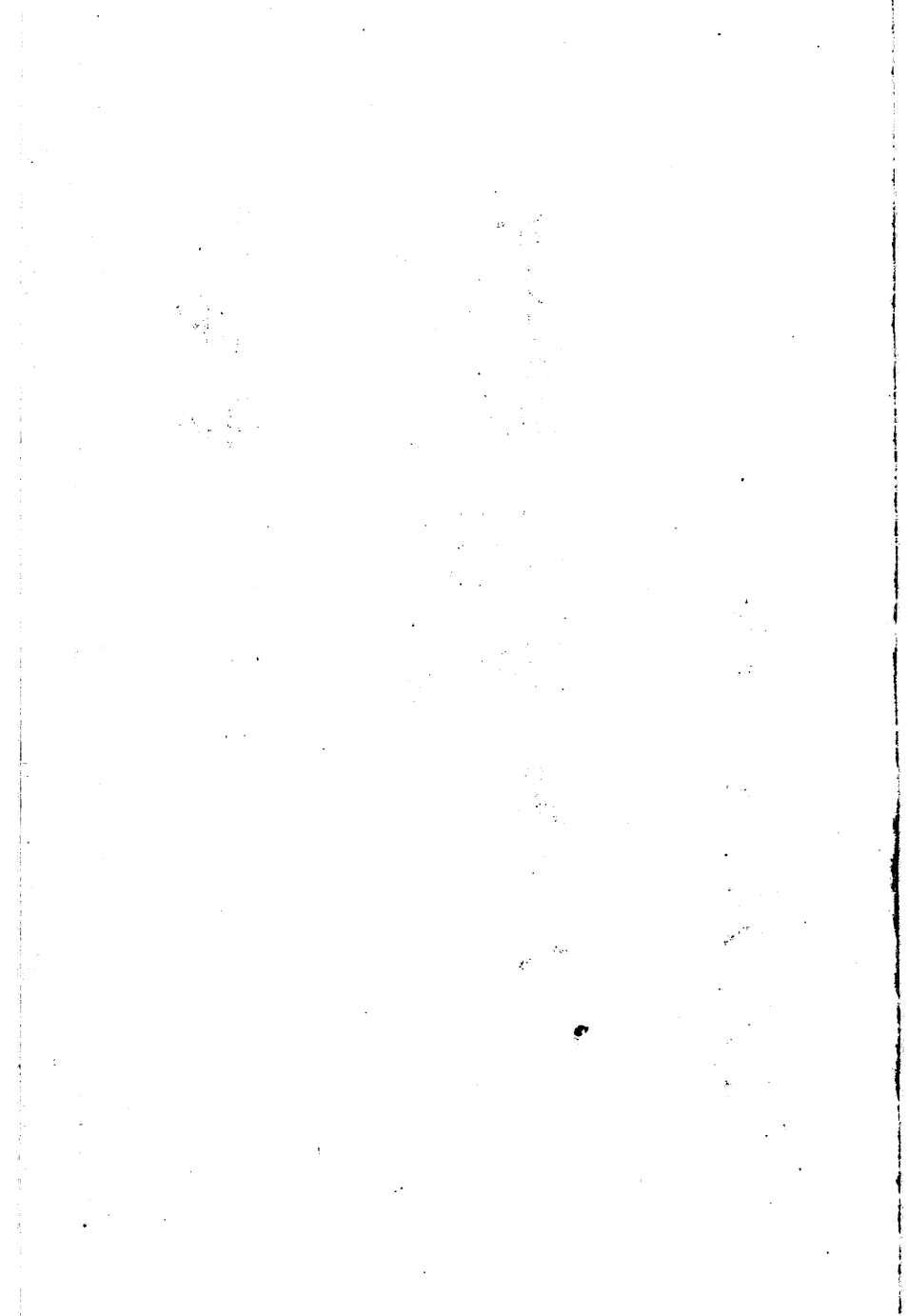
黒木勘藏校訂

帝國文庫
第十篇

紀海香
並木宗輔
淨瑠璃集

全

東京
博文館版



解題

黒木勘藏

貞享年間に大阪の道頓堀に竹本座が創立されて、元祖竹本義太夫と近松蓑林子との二大天才の力によつて人形劇が向上・隆盛の機運に向ふ事となつてから約五十年を経過した寛保・延享前後に及んで人形劇の黄金時代を現出して、我が國近世の演劇史上・文學史上極めて重要な意義を有する一時期を劃するに至つた。而してこれが爲には、作者と演出者との協同努力と、之を愛好した觀客の働きとに基因する事の大なるは言ふ迄もないが、竹本座に對して豊竹座が創立されて兩座對峙競争の姿となつた事が亦重大なる一原因であつた。されば「竹豊故事」(寶曆六年刊、一樂子著)は「竹本豊竹兩座と成てより東は西に負まじ、西は東に勝らんと互に勵み出來、益々芝居繁榮し、淨瑠璃の作者は種種様々の趣向を工み出し、道具建にも金銀を惜まず金襴にて舞臺を輝かし、或は數寄屋懸りの粹なる思ひ付に智恵袋の底を振ひ、人形の衣裳には縮緬緞子金襴等にて美麗を盡し、詰人形の外は皆々足付となり、出遣ひの外は介錯足遣の立懸り、歌舞伎役者の所作より増りて天晴見物事なり。併し西か東か一座ばかりにては斯く繁昌もせまじ。」と言つてゐる。かういふわけで竹本座に對する豊竹座の對立は、人形劇の發展隆盛上から見れば頗る重大なる價値を有つてゐた。而して豊竹座の創立者は初代竹本義太夫の門弟豊竹若太夫、後の豊竹越前少掾であつたが、彼の六十年に及ぶ長い藝歴は、殆んど豊竹座と終始したといつてもよい程である。即ち彼の名によつて權をあげられ、のち其の座の太夫と座元とを兼ねて演出經營兩方面の重大任務を負擔されてゐた豊竹座は、彼が世を去つた明和元年以後數年ならずして

一度退轉の悲運に陥り、それと相前後して竹本座も亦經營難に陥つて昔日の隆運を見ず、かくして人形劇の全盛時代は去つたのであつた。

されば豊竹座は全く豊竹越前少掾の豊竹座であつたと謂つて差支ない程である。處てかういふ歴史的地位にあつた豊竹座の作者について見れば、その創立時代から全盛時代に亘つては紀海音と並木宗輔との二人が最も注目すべきである。その中海音の作者生涯は豊竹座の創始時代に始つて竹本座の近松と相對峙して、丁度近松が世を去る迄續いて居る。而してその跡を受けて竹本座の文耕堂・竹田出雲等に對して豊竹座の隆盛時代の作者として腕を揮つたのが並木宗輔で、彼の亡き後は豊竹座は全く群小作者の寄合となつて了つた。故に海音と宗輔とは豊竹座の作者としては最も注目すべきであると共に、やがて我が淨瑠璃史上に於ても重要な位置を占める作者たることは言を俟たぬ次第である。今まづこの二人の略傳を述べ、次いで本書所收の作品について簡単に解題を加へる事とする。

紀海音小傳——姓は榎並、俗稱喜右衛門、のち善八と改めた。紀海音は淨瑠璃作者としての號である。寛文三年大阪御堂前雛屋町の鯛屋善右衛門の二男として生れた。鯛屋は菓子製造の名高い店舗で、彼の父は明暦二年正月永田山城大掾藤原貞因と名の口宣を頂戴して、御菓子所山城大掾の看板を掛けてゐた。文藝の嗜深く、狂歌に長し、俳諧をよくし、別號を長閑堂、白后齋ともいつた。その弟は榎並清右衛門といひ、やはり文藝を好み、貞徳の門下で花實庵貞富と號した。又その長男、即ち海音の兄は有名な狂歌師油煙齋貞柳である。かういふ風に文藝的空氣の濃厚な家に生れた海音は、始め黄檗山悅山和尚の門に入つて高節と號し、大和の柿本寺に居たが、のち還俗して大阪に住み、醫を業とし、傍ら俳諧を安原貞室に、和歌を契沖に學んで、契因と稱し、鳥路觀と號した。又狂歌を兄貞柳に學んでその號を貞我といつた。享保九年兄貞柳の跡を受けて鯛屋の家督を繼ぎ、元文元年法橋に敘せられ、寛保二年十月四日八十

歳て世を去つた。八丁目寺町の日蓮宗の寺院寶樹寺に葬つた。法名清潮院海音日法居士。

海音が淨瑠璃作者として立つた年は明かでない。淨瑠璃譜は元祿十五年三月、越前少祿がまだ竹本采女と稱へた頃、筑後豫旅興行の跡芝居で語つた「傾城懷子」を以て海音の作として居る。これが記録上の最も古いものであるが、惜しい事に正本の所傳を耳にしない。次に元祿十六年に豊竹座上場の「心中涙の玉井」及び「金屋金五郎浮名額」共に海音の作といふ説もあるが、正本には署名はない。現存正本中海音作の署名あるものとしては、本書に收めた「梶久末松山」が最も古く、以下正本の現存するものは總計で四十七篇を數へる。その中「梶久末松山」「おそめ久松袂の白しぼり」「丸腰連理松」「傾城三度笠」「傾城思升屋」「なんば橋心中」「梅田心中」「八百屋お七」「笠屋三勝廿五年忌」「心中二つ腹帯」の十篇は世話物で、その他は時代物である。近松の作は、淨瑠璃だけでも約百二十篇の多數に上るに比しては比較にならないが、四十餘歳から六十二歳迄の二十年間の作者生活の間にこれだけを自分だけで書き上げたのは、文耕堂・出雲・宗輔以下の諸作者に合作物の多いのに比して健筆であつたと言つてよからう。殊に世話物が十篇に及び、その中に注目すべき佳作や、歴史的に價値ある作品のあるのは、近松を除いた他の作者に類を見ない所である。海音の特色は一言之を掩へば理智的である。その文は敘述的であり、客觀的であり、時に場面の描寫よりは筋を物語る平板なる敘事に墮する嫌がある。彼も亦近松と同じく義理と人情との葛藤をよく描いたが、その場合には、常に人情を以て義理の犠牲として、徒に空疎にして概念的の義理を強調しようとする傾がある。されば淨瑠璃作者としての天分に於ては、遠く近松に及ばないとしても、また一方に於ては、作の結構布置の整然として、如何にも理に詰んで居る點などは、却つて近松に見られない處である。この特徴は同じ豊竹座の作者たる彼の後繼者並木宗輔にも影響して、その作品には周到なる用意の下に、前後の場面の關係を巧妙複雑にして變化を圖り、技巧を弄したのを見るに至つたのであるまいかと思ふ。

並木宗輔小傳——大阪の人で、通稱松屋宗助、市中庵と號した。初め俳諧を學んだが、のち西澤一風の門に入つて淨瑠璃作者となり、享保十一年四月豊竹座上場の「北條時頼記」を西澤一風・安田蛙文と合作したのがその處文作で、時に三十歳であつた。これより先豊竹座は享保八年七月紀海音が「傾城無間鐘」を最後として淨瑠璃の筆を絶つてよりは、西澤一風・田中千柳の連名で引續いて新作を上場したが、不當り續きてあつたので、事實上の執筆者であつた田中千柳は享保十年末に豊竹座の作者を辭して上京し、同座は作者難に陥つた。この時同座の元老格たる西澤一風が中心となつて想を構へ、並木宗助と安田蛙文とをして作り上げさせたのが「北條時頼記」である。四月八日初日で翌年の閏正月末迄引續いて興行した程の大當りて、これによつて豊竹座の基礎は初めて確定した。本曲の成功は無論宗助一人の働きではないが、これによつてその作者としての手腕は認められたものか、作者としての一風の名は見えなくなつて、享保十二年二月の「清和源氏十五段」を始めとして元文五年二月の「鶴山娘捨松」に至る迄に年々豊竹座の爲に新作を提供し、その數前後合せて廿八篇に及んで居る。單獨の作もあるが、半數は安田蛙文との合作である。而してこの間の作としては、本卷に收めた諸篇が代表的のものである。その後暫く豊竹座のために殆んど筆を執らなかつたが、延享二年並木千柳と名のつて竹本座に轉じ、三好松洛・竹田出雲・竹田小出雲等との合作として「軍法富士見西行」(延享二年二月)「夏祭浪花鑑」(延享二年七月)「楠昔嘶」(延享三年正月)「菅原傳授手習鑑」(延享三年八月)「義經千本櫻」(延享四年十一月)「假名手本忠臣藏」(寛延元年八月)「双蝶々曲輪日記」(寛延二年七月)「源平布引瀧」(寛延二年十一月)等を始め合計十一篇を寛延三年十一月迄の間に作つた。この期間が人形芝居の全盛期の頂點で、又今日でも無聲生命を有する傑作が次から次と作られた時であつて、座元で作者を兼ねて居た出雲と共に千柳の功績は没すべからざるものである。

寛延三年十一月竹本座興行の「文武世繼母」(三好松洛との合作)を限りに竹本座を去つた千柳は、翌寶曆元年には

又々宗輔の名で豊竹座の爲に「一谷嫩軍記」の三段目迄を作り、その完成上演を見ずして、同年九月七日に五十七歳を以て歿した。但し宗輔の歿年に關しては、寛延二年九月(聲曲類纂)、寛延三年九月(名人忌辰録)等の説もあるが、濱松歌國の「攝陽奇觀」の寶曆元年説が、その著作年表の上から見れば最も矛盾が無いから、私はこれに従ひ度いと思ふ。初め彼は作者の署名にも通稱の宗助をそのまま記して居たが、元文元年頃から宗輔と改めた。劇界で並木を名のる作者の祖であつて、その門下からは寶曆期の歌舞伎の名作者並木正三を始めとして、並木丈輔・永助・良輔等の作者を出した。又彼の別號千柳(千柳として二世)は丈輔の弟子翁助によつて繼がれた。

宗輔は淨瑠璃の合作を最も大膽に行ふやうになつた最初の作者ともいふべきであつて、自然その作品には合作の長所と缺點とを示して居るものが多い。即ち一篇の作品に有機的關係が乏しく、趣向に趣向を重ね、人物相互の間に色の複雑な因縁や關係を持たせ、伏線を好みに利用して讀者や見物の興味を一篇の山に集注させるやうな用意は極めて周到に施された作が多い。舞臺上の技巧と實演者の技倆とが進歩した場合に、又一方に於ては趣向の複雑と脚色の斬新奇抜とを歓迎した觀客本位の實演用の淨瑠璃作者としては勝れた手腕を有つた一人であつたといふべきで、この點ではその先輩であつた海音は遠く彼に及ばなかつたと言つて差支ないと思ふ。

以下本書に収載した二人の作品について簡単に解題を試みる事とする。

第一 紀海音の作

椀久末松山

寶永五年三月三日から「新利屈物語」の切として豊竹座興行。時に作者四十六歳。有名な椀久の事柄を材題としたも

のである。實説として傳へる處によれば、梶久は大阪御堂前の豪商で梶屋久右衛門といつたが、大阪新町の遊女松山に溺れて監禁されたので發狂し、炮烙頭巾のまゝて家を飛出して狂ひ歩いた。それで京五條坂の別邸で療養させて平癒し、のち延寶五年九月七日病歿したといふ。この巷説は、俗謡にうたはれ、歌舞伎芝居で演じられ、又浮世草紙にも綴られていよ／＼有名になつた。それを海音は取つて淨瑠璃に仕組んだのである。

その荒筋はかうである。梶久は松山に溺れて贅を盡した學句に、井筒屋で節分の豆蒔きの代りに五十兩の金銀をまいて一座の者に拾はせて居る場へ、親の久右衛門が來てその鬢を切つて勘當した。梶久は舅義右衛門の許に監禁されて居たが、松山は廓を抜けて逢ひに來たが、女房おさんの貞實なのに感動して、田舎の客に身を任せようとして去り、梶久は悲しみの餘り發狂して、狂ひ廻る途上、請出されて行く松山にあひ、田舎の客の情で松山は梶久に與へられるいふ仕組である。初代都一中の正本に同外題で、殆んど同文のものがあるが、その先後は不明である。

劇の梶久物としては最も注目すべき作で、後に作られた梶久を材題とした諸作は、直接間接本曲の影響を受けて居る。といつてよい。

八百屋 お七

外題年鑑に寶永元年二月十五日から豊竹座で「八百屋お七歌祭文」を興行したとあるが、その正本はまだ見ない。故に現存の「八百屋お七」との関係は明言し得ない。享保十七年正月豊竹座興行の「八百屋お七戀緋櫻」は同文で、これは外題だけをこの際改めたに過ぎない。故に原作はこれより前の作たるは明かであるが判然しない、併し遅くとも正徳年間には作られたもののやうである。

八百屋お七は吉祥院の小姓吉三郎と深く契つたが、父久兵衛は火災の後、その家を再築する費用を借りた義理合上

からして、萬屋武兵衛からお七との結婚を迫られてこれに同意しなければならぬ立場となつた。お七はこれを悲しみ、自宅に放火して再び吉祥院に寄寓して吉三と一緒にならうとしたが、捕へられて鈴が森で處刑され、吉三も刑場で自害してお七の後を追ふといふ筋であつて、上巻は吉祥院の場、中巻は八百屋の場、下巻は牢屋前から道行、鈴ヶ森刑場に分れて居る。

本曲は元禄末から寶永初年頃に行はれた八百屋お七の歌祭文の影響を受けて居ることは、下巻の「八百屋お七江戸櫻」の一齣によつて明かである。又西鶴の「五人女」（貞享三年）の卷四八百屋物語に負ふ處のあるのは、上巻發端のお七濡れの場面が西鶴の雷鳴の夜に忍ぶ條の譚案であり、中巻も西鶴の雪の夜の情宿の脱化と見られる點などによつて明かである。

海音の世話物中出色の作で、後の八百屋お七の戯曲に及した影響は大きい。延享元年四月豊竹座上場の爲永太郎兵衛の作「潤色江戸紫」はこの改作で、更にこれを作りかへたのが安永二年四月北堀江座で興行した菅專助の作「伊達娘戀緋鹿子」で、後の歌舞伎の火の見櫓のお七の人形振はこの作から出てゐる。

富仁親王嵯峨錦

明和板の外題年鑑には寶永六年六月豊竹座上場、享保五年三月同座再興行とある。但し本曲が「丑の年」（寶永六年又は享保六年）に作られた事は本文にその證據があると共に、又作中に四寶銀と新銀との併用されて居る（享保四年から享保六年十二月迄）間の作たる證もあるのによつて考へると、享保六年の作ではなからうかとの疑もあるが、今姑く年鑑に従つて置く。

富仁親王（花園女帝）がその異腹の兄宮に當る蟠海僧都の王位篡奪の野心抑壓の手段として男裝し給ふが爲に種々

の波瀾を捲起すといふ趣向で、女繪師狩野雪姫と彫刻の名人左甚五郎とが、蟠海僧都に強要されて、人質に取られて居る夫や母の命を救ふために、決死の一念をこらしたために夢想によつて弘法大師の筆といふ小野小町の像と同一のものを、それ／＼製作するといふのを全篇の骨子としてある、發端に富仁親王が嵯峨へ紅葉御覽の行幸ある條に因んで外題をつけたらしい。

作中の狩野雪姫の事は、既に宇治加賀掾の正本「女繪師狩野雪姫」に仕組まれて居るが、これを本として作つたもので、更に後の「祇園祭禮信仰記」の雪姫の藍本となつたものらしい。又三段目左甚五郎の場は全篇の山で、後の「京人形」の原據とも見られる。海音の時代物中에서도稀に見る力の籠つた面白い場面であると思ふ。

おそめ 袂の白しほり

正徳元年四月八日から豊竹座上場。大阪の東堀瓦屋橋附近の油屋太郎兵衛の一人娘お染は子飼の丁稚久松と親や主人の目を盗んで相通じて居た。然るに太郎兵衛はお染を親類の山家屋へ繰付けようとし、久松の在所の父も亦久松を連辰らうとしたので、二人は前途を悲しんで、家人が山家屋へ招待の留守中に情死を遂げたといふ筋。

この實説については従來心中否定説が行はれてゐたが、私はやはり二人は心中したものと考へる。而してそれは寶永五年正月の事らしいが、これが直に歌祭文となつて歌はれ更に寶永七年正月には大阪の荻野八重桐座で「心中鬼門角」といふ外題でこれを仕組んだ歌舞伎が荻野八重桐（おそめ）松川常之丞（久松）櫻山庄左衛門（油屋主人）等によつて演じられた。本曲はこの歌祭文と「心中鬼門角」とを粉本として作られたものであつて、海音の世話物中では名作の一つであると共に、後に及した影響も大きい。淨瑠璃の改作物としては、革足袋の意見で知られる「染模様妹官門松」（明和四年十二月、菅專助作）と、野崎村の段で名高い近松半二の「新版歌祭文」（安永九年九月）とがある。

傾城 三度笠

正徳三年十月十二日から曾根崎新地で興行された豊竹座の「播州曾根松」の切として上場。近松の「冥途の飛脚」の原作。大筋は次のやうである。忠兵衛が商用で江戸行の留守中に、その養母は忠兵衛の許嫁となつてみた姪のおとらを思ひ合つて居た新七と添はせた。歸つてこれを聞いた忠兵衛は、その代りに馴染の梅川を身請しようとし、友達利右衛門の親切を誤解して、それと張合ふために爲替金の封印を切つて梅川を身請して大和に走り、新七の許に潜んで居たが、遂に召捕へられるといふのである。

この作では新七おとら夫婦及びその父新兵衛が、忠兵衛と梅川をかくまふ爲に苦心し、殊に新兵衛は二人を落してその罪を一身に引受けようと迄する條に作者は大いに力を入れてゐる。義理に詰んだ作柄であつて、原作たる「冥途の飛脚」と本曲とを比較すれば、近松と海音との作風の相違はよく分ると思ふ。

活字に覆刻したのは今回が初めてである。

愛護若冊箱

正徳四年十月朔日から豊竹座興行。印度の阿育王の太子狗鞞羅が繼母の戀を斥けたためにその腹いせに讒せられて父王から放逐されて、流浪の辛酸を嘗めるといふ話が今昔物語の巻四にあるが、この説話の系統を引くと思はれる説經淨瑠璃の「あいごの若」は、古浄瑠璃にも轉用されて語られた。而してこれを改作したものに元祿六年正月竹本座興行の「都富士」がある。こゝに収めた本曲はこの「都富士」の改作であつて、後の「愛護若名歌勝鬨」(寶曆三年五月、竹本座上場)の原據となつた作である。

左大将清平の子愛護若は右大将有雄の女六條姫と大納言爲明の女鳩照姫とに思はれて居た處が、有雄は腹黒き人物で、反逆を企てて、六條姫を清平の後妻として清平をも一味に引入れようと企てた。然るに名義上は母となつても、六條姫は愛護若を思ふ情念は募るのみであつたので、その不倫が清平の忌憚に觸れて六條姫は斬られ、愛護若は追放のゴとなつた。併し姫の執念はなほ附纏つたが、忠臣早苗之介夫婦の働と佛力とによつて執念は退散して、愛護若は鳩照姫と添ひとげるといふ筋である。

鎌倉三代記

享保三年正月二日から豊竹座興行。

頼家が暗愚にして酒色に溺れて居るのに乗じて、比企能員は京都六條の遊女二人を密かに呼下して養ひ、その一人を若狭前と名のらせて頼家の室として外戚の威を振ひ、又他の一人である浅茅は畠山重忠の子重保とは以前からの情人であるのを奇貨措くべしとして、態と女嫌ひの朝比奈三郎に嫁せしめて、重保との間に三角關係を作らせるやうにして、これを和田畠山二大族の確執の因とし、かくてその間隙に乗じて將軍家を横領しようとした。併しこの隠謀は若狭の兄花垣の告白によつて露顯し、能員は和田畠山のために滅されるといふ筋である。鎌倉三代記中の比企能員の謀叛を中心として脚色したものと云ふべきであらう。

天明元年三月作の「鎌倉三代記」は同じ外題であるが、これは大阪落城の事件を鎌倉の世界にして脚色したもので、本曲とは全く内容の別なものである。

義經新高館

享保四年正月廿日豊竹座初日。

古淨瑠璃の「高館」以來有名な義經主従の高館に於ける悲壯なる末路を借りて、これに大阪落城を託して脚色した作である。作中の主要人物である頼朝は家康、義經は秀頼、禪頭兼房は片桐且元、和泉三郎は眞田幸村、三郎一子大助は眞田大輔、龜井六郎は木村重成に當ててある。

従來其筋を憚つて殆んど觸れ得なかつたが、戯曲としては絶好の材題である大阪落城を頗る大膽に又巧妙に假託した點に於ては、これより先、同じ作者によつて關ヶ原の戦を扱つた「頼光新跡目論」よりは一段と鮮かである。而して作者は和泉三郎龜井六郎等高館方の主要人物に同情を寄せ、殊に泉三郎を中心人物として描いてゐる。

本曲は後の「南蠻鐵後藤目貫」の原作となり、引いては「近江源氏先陣館」「鎌倉三代記」「日本賢女鑑」等の原據となつたものとも見られるので、この系統の淨瑠璃としては頗る注目すべき作である。

心中二つ腹帯

享保七年四月六日より豊竹座興行。この前年享保六年四月五日宵庚申の夜のお千代半兵衛の情死事件を扱つたものと思はれる。而して實際は八百屋の姑婆は蟲も殺さぬ人よして、亭主の伊右衛門は若い女好で嫁のお千代を口説いたのが元であつたのを、作者は姑婆を悪人に剪を善人に作りかへたのだといふ(傳奇作書)。

荒筋はかうである、遠州濱松の土山脇十藏は、その子半六が艱難の相があるので侍を止めさせよとの主君の情ある内命に従つて、大阪新製油縣町八百屋仁右衛門の養子とならせて、半兵衛と稱へて暮したが、一年人數改めに歸省中女房千代が姑去りに逢つた。侍氣質の半兵衛は、養母に對する孝行と行く先もない妻に對する情義とを考へて進退に窮し、遂に女房と共に宵庚申の夜生玉馬場先大佛殿の勸進所の門前で女夫心中を遂げるといふのである。その最期に臨

んで半兵衛が、お千代の白縮緬の抱帯を二つに切らせて、その一筋で自分が舊主への中譯として先づ切腹したその傷口を捲き、他の一筋でお千代の腹にある四月目の胎児に、せめてもの心で腹帯をさせて心中するので、そこで「心中二つ腹帯」と名づけたのである。

本曲は大當りであつた。同じ材題を扱つた近松の「心中宵庚申」は竹本座に十六日遅れて上場されたが立後れの爲もあつたか豊竹座に壓倒された。そこで、豊竹座は大當りのために、千日の法善寺へ石碑を建てて供養したのを、八百屋では大いに怒つて、夜分に石碑を豊竹座の木戸前へ移して建てさせた處が、却つてこれが逆に一人人氣を煽つたなどいふ話（反古籠）も傳はつて居る。海音の世話物中名作の一つである。

傾城無間鐘

享保八年七月十五日から豊竹座興行。紀海音の最後の作で、時に作者六十二歳。作中に初春の行事や景物を當込んだ箇所が多くて、益興行としては如何かと思はれるふしもあるが、姑く外題年鑑に従つて置く。

山梨日向前司久國が叛逆を企て、足利頼兼を酒色に溺れさせ、遊女今川とその情人伊勢新九郎長氏との間に生れた茶々丸を、今川の父近藤平次兵衛から貰ひ取り、これを頼兼の落胤と稱して養育して、天下を奪はうとの計畫を進めた。久國の聲今川俊秀とその妻淺香とはその奸計を知り、これが阻止のために種々の迫害を受けつゝも同士と共に盡力して、遂に頼兼と茶々丸と公然親子の對面をするといふ日に、悪人の奸計をあばくといふ仕組である。

第四段に遊女今川が父の末期の遺言に従つて、茶々丸を久國の手より取戻して足利家の禍害の種を除かうとして、久國の前で父の晝いた無間の鐘を撞く場面がある。題名の基づくところである。無間鐘の説話を劇に仕組んだのは歌舞伎の方ではこれより前にもあるが、淨瑠璃ではこれが始めてある。本曲は海音の時代物中有数の佳作である。

第二 並木宗輔の作

攝津國長柄人柱

享保十二年八月十五日から豊竹座興行。作者並木宗助 安田蛙文。

暴横潜上到らざるなき蘇我入鹿は、戀慕に事よせて皇極天皇を弑し奉らうとした。忠臣藤原鎌足はその女藤原照姫を身代りとし、帝を奉じて浪花の里に隠れ、長柄の人柱に立つた岩次兵衛の女おこよを蘆刈女に扮装させ、鎌足の家に傳はる神通力のある鎌を持たせ、蘆刈の所作の間に入鹿に近附かせて遂に之を滅すといふ仕組で、四段目の岩次内から袴流しの段、人柱の段が全篇の山で、この段は後にも度々繰返されてゐる。又五段目蘆刈の段は謠曲「蘆刈」の繚案で、初演の時には太夫豊竹上野少孫、ワキ豊竹和泉太夫、三絃野澤喜八郎の出語りて、人形は藤井小三郎の出遣であつた。

南蠻鐵後藤目貫

享保二十年二月七日から豊竹座上場。前掲紀海音の「義經新高館」を藍本として、世界を南北朝時代に取つて、大阪落城の事件を一層大膽に描破した作。足利尊氏を徳川家康、新田義興を曲野秀頼、舟田左衛門利村を眞田幸村、江州に住む目貫の名工後藤又治を後藤基次に假託して、この醉漢後藤が舟田の切なる推挙に動かされて軍師として大阪城に入る事、舟田が空砲で後藤の本性を試みる事、後藤の妻關女が尊氏を砲撃する事等の條に山を設けて脚色してある。その描寫が餘り赤裸々で大膽なために、其筋から出版を禁止されて寫本のまゝで傳つて居り、外題も「南蠻鐵後藤目貫」の外に「南蠻銅後藤目貫」「南蠻鏡後藤目貫」などがあるけれども、いづれも内容は同一である。

處が延享元年三月江戸肥前座に於ては、本曲を取つて「義經新倉伏」と改めて興行した。尤も作の上にも多少筆を加へ、先づ世界を海音の「義經新高館」と同じ鎌倉時代とし、問題となつた關女の尊氏砲撃の露骨な條に改修を施したが、併し大體に於て結構脚色共に原作と大差はない。後藤伊達目貫、泉三郎伊達目貫等皆同物である。本書に改めたのはこれである。

本曲の第二段日本田館での番場忠太が後藤大三郎へ配膳の條は、近松の「信州川中島合戦」の輝虎配膳の繙案で、この大三郎は「義經新高館」の大助を作りかへたものと思はれる。又四段目の堅田浦に於ける後藤と大三郎との出合は、後の「一谷嫩軍記」の須磨浦の段と同趣向である。

刈萱桑門筑紫蝶

享保二十年八月十五日から豊竹座上場、並木丈助との合作。

信州善光寺の親子地藏の縁起を題材とした説經の「かるかや」は既に寛永八年版もある程で、古くから行はれたものであつたが、更に寛文二年には「かるかや道心」が刊行されて世に流布するに至つた。本曲はこれを本として、更に色の趣向を取入れて作り上げたもので、宗輔の作中での一代代表作であるのみでなく、淨瑠璃中での名作の一である。

筑前の大名加藤左衛門繁氏は酒盃の中に櫻花の散るを見て無常の心を起した折柄、日頃睦しく見えるその正妻と側室とが、假睡の中に頭髮が蛇となつてもつれ合ふを見て、こゝに外面如菩薩内心如夜叉の理を感じて一念發起し、高野山に遁れて刈萱道心となつた。國許では隣國豊後の大領大内義弘が、加藤家の重寶夜光珠を得ようとて、使者に遣した新洞左衛門の女夕してが守宮酒の計略にかゝつたのを憤り、兵力に訴へようとする。繁氏の妻は一子石童丸と共に夫を尋ねて高野山に向ひ、學文路の宿の玉屋與次夫妻の助けを得て登山したが、母は女人堂で病死し、石童丸のみ

は幸じて父に邂逅した。折柄加藤家の臣監物太郎が大内義弘に縄をかけて来ると、莉萱は、助けるも殺すも私には計らひ難し、都へ行つて奏聞の上命乞をしてやれ、それぞ我が子石童を筑紫へ送る轅なれといふに終る。二段目の切繁氏畫置、三段目切守宮酒の段、四段目學文路辻堂夢の段、與次内の段、五段目山の段等が名高い。

和田合戦女舞鶴

元文元年三月四日から豊竹座興行。寶永元年正月竹本座上場の「悦賀樂平太」の改作である。將軍實朝の妹齋姫は冷泉爲氏を思慕して居たが、藤澤入道安靜は、老職和田新左衛門常盛と江間太郎義時とが共に前將軍頼家から姫を妻とする許可を得て居たといつて争ふを利用し、姫を囮として兩家の間に戀争を起させて、その間隙に乗じて天下を傾けようと企てた。然るに在柄平太夫妻、阿佐利與市の妻板額一子市若等の働きによりて悪人は滅びて、和田北條兩家和解し、齋姫は情人爲氏に嫁するといふ筋である。二段目の切板額門破り、三段目の切市若切腹、四段目の口阿闍梨の場、切小倉山の段等が名高い。

初演の時阿闍梨の場を豊竹河内太夫が語つて好評であつたが、この場は滑稽味を發揮するのを特徴とするので、「阿闍梨場」が訛つてチャリ場といふ言葉が起つたといはれる。

七條 河原 釜淵雙級巴

元文二年七月廿一日から豊竹座興行。いふ迄もなく強盜石川五右衛門の事件を題材とした作である。石川五右衛門を仕組んだ最初の淨瑠璃は、貞享頃の作と思はれる、松本治太夫の正本「石川五右衛門」で、これを改作したのが、近松の「傾城吉岡染」(正徳二年)である。この作では石川五右衛門は、兵法の師匠たる吉岡憲法の窮迫を救ふためにふと

した誘惑より盗み心がついて、遂に變幻出沒の妙を極める大強盜となつたが、憲法親子を救はうとした爲に捕へられて釜煎の極刑に處せられるといふ脚色である。本曲はこの改作であつて、五右衛門を義賊とした點は共通であるが、原作の憲法に關する筋は全く削除して、憲法と遊女吉岡との關係を五右衛門と瀧川との關係に歸案し、又憲法と吉岡との間の子を五右衛門と先妻お律との間の子に作りかへて、五右衛門を主人公としてある。上中下三卷より成り、上卷は河内美豆野狩場騙りの段から鳥原澤瀉屋の瀧川盗出しの段迄、中卷は柳の馬場當馬浪宅より五右衛門住家の繼子いぢめから瀧川本心告白迄、下卷は藤の森の刀賣、五右衛門父子召捕・七條河原釜煎に終つてゐる。

石川五右衛門の戯曲としては系統的に見て重要な位置に立つ作である。

鳩山 姫 捨 松

元文五年二月六日より豊竹座興行。謡曲「雲雀山」や中將姫の傳説などを材題として作つた竹本筑後掾の正本「當麻中將姫」(元祿九年四月)の改作である。

横佩中納言豊成の後妻岩根御前は、繼子中將姫を憎み、豊成が天子から保管を命ぜられてゐた千手觀音の像を忍びの上手の者に盗ませて、その罪を中將姫に負はせ、雪中に獄舎を構へてその中に姫を入れて呵責の限りを盡す。侍女桐ヶ谷が浮舟と牒し合せて姫を打殺したる體に見せて、虎口を通れさせて、雲雀山に隠れた。これを知つた岩根は執念深く追跡し、姫の首を討つて渡せと自ら檢視のために乗込んだ。横佩家の執權左京之進晴時と久米八郎とは苦心して身代りを立てたが觀破されて進退に窮した際に、烈婦更科が岩根の實子千壽の首を携へ來つてその積惑を追究し、佛像を盗ませた上に殺された夫の仇であると稱へて岩根を刺殺し、姫は出家するといふ筋である。三段目の切雪責の段が最も名高い。のち寛政九年二月道頓堀東の芝居で「中將姫古跡松」と題して三段目を出してから、この外題が行は

れ、現在もこれで通つて居る。

四段目の雲雀山の隱家て、晴時と八郎とが姫の急を救ふために相談をして、

思ひ廻す程大事の場所。高うは言はぬが身代りはどうであらうぞいなう。サアおれもさうは思ひ付いたれども、是迄に手をかへ品をかへ様々の身代り。仕盡して仕様がなない。どう思ひ廻しても身代りは古い。いやさう片意地にも言はれぬ。古いといふならば。朝夕すわる膳部。此世始つての八木(米のこと)かし洗うて炊き上げ、ぎやつと産れて乳ばなれより今日迄食すれども。命をつなく一粒萬倍。眞實の甘露の味ひ。幾度食ても飽かぬぞや。身代りも忠義の誠。誠を以て姫の身命を養はば古くとも一口は大事あるまい。

と言つて居るのは、作者の身代りに對する態度も見えて面白いではないか、身代りは芝居道で忠義を表現する場合の米の飯であると思つて居ればこそ、これから後でも何遍でも繰返されたのであらう。又岩根が「目通りで首討たせよとの仰。生き顔と死顔とは相好の違ふ物……」といふのも、寺子屋でお馴染の松王のセリフと、近松の「吉野都女桶」の東寺首實檢の場の大森のセリフとの連鎖をなすやうに思はれて興味がある。

一 谷 嫩 軍 記

寶曆元年十二月十一日から豊竹座興行。正本には作者として淺田一鳥・浪岡鯨兒・並木正三・難波三藏・豊竹甚六等五人の名を連ねた上に故人並木宗輔の名をも掲げてある。宗輔は本曲の三段目迄を作つて物故したので、そのあとを淺田等が追加して一篇に纏め上げて上演したのであるといふ。既にこれ迄多くの作者に依て幾度も扱はれた熊谷と敦盛、忠度と六彌太との物語を大きく纏ひ交せた爲に随分複雑な筋になつて居る。全篇五段の場割を略示すれば次の様になる。

(初段)大序―堀川御所(熊谷六彌太陣)中―北野天神の場 卿の君自害、切―經盛館(敦盛出陣)。(二段目)口―一の谷

陣門（小次郎先陣）、中一組打（敦盛最期）、切一菟原の里林住家（太五平出陣、六彌太忠度へ櫻の枝渡し）。（二段目）ロー彌陀六内の場（小雪と若菜實は敦盛との濡事）、中一御影の松原（青葉の笛渡し、寶引）、切一熊谷陣屋。（四段目）道行（菊の前と乳母林との鎌倉行）、ロー鶴が岡八幡の場（菊の前危難を救はれし深編笠の侍より忠度の敵は六彌太と教へらる）切一六彌太館（衆人齋事太五平の述懐）。（五段目）、大内の場（寶劍取返し）、扇谷平山陣所（六彌太叛逆入平山を討つ）。

本曲では二段目の組打から三段目の切の熊谷陣屋迄が勝れてゐて、今日でもよく上演される。この間の荒筋はかうである。大序彌川御所の場で義經から辨慶の書いた「一枝を伐らば一指を切るべし」との制札を渡された熊谷は、若木の櫻をいたはれといふ義經の心を汲んで、一の谷で院の御胤である敦盛卿を助けて我が子の小次郎を身代りにしてその首を討つて、自分の陣屋に於て義經の實檢に供へる。敦盛のために供養の石塔を建立して居た彌陀六も梶原のために陣屋に引かれて來て居たが、義經は眉間のほくろによつてそれが昔自分達が伏見の里で雪の夜に救はれた宗清であると觀破して舊恩を謝し、寸志として彼が大切に育てる小雪への土産として鎧櫃を與へる。中には敦盛が忍んでゐる小雪は重盛の女で敦盛の情人である。世の無常を悟つた熊谷は出家する。これが三段目の切である。

瑠璃天狗 五卷 囊笠翁著

著者の傳未詳。淨瑠璃の名作十四篇十八段を取つて註釋を加へたもの。大抵その當時よく行はれた曲である。文化三丙寅秋の掠費居士の序文があるのによつて見れば、この年成つたものと思はれる。明治以前に於ける淨瑠璃の註釋書としては、穗積以貫の「難波みやげ」と並び稱せられたもので、淨瑠璃註釋書としてはこの二書以外にはなかつた。しかも著者は「難波みやげ」のやうに儒者氣質の堅苦しい行き方をしないやうにと心掛けて筆を取つたらしい跡が見える。今日でも參考とするに足る著述である。

紀海音淨瑠璃集

目次

椀久末松山	一
八百屋お七	一九
富仁親王嵯峨錦	四三
久 <small>はと</small> 松 <small>り</small> 袂 <small>ゆき</small> の白しほり	八三
傾城三度笠	一〇五
愛護若峙箱	一二五
鎌倉三代記	一五九
義經新高館	一九一
心中ふたつ腹帯	二二五
傾城無間鐘	二五二

並木宗輔淨瑠璃集

攝津國長柄人柱	二九一
南蠻鐵後藤目貫	三〇三
刈萱桑門筑紫轢	三九七
和田合戰女舞鶴	四四九
河七 <small>原</small> 釜淵双級巴	五〇一
鷗山姫捨松	五三三
一谷嫩軍記	六九七
瑠璃	*
天狗	*
狗	六五九

—— 目次終 ——